
好きな人

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きな人

【Nコード】

N6030Y

【作者名】

鈴蘭

【あらすじ】

たくさんの短編集を書きたいと思っています!!
誤字脱字目立つと思います!

Happyウエディング！

ずっと待ってたこの日。

俺と蘭が結ばれるこの日。

蘭に気持ちいを伝えた時の日を思い出す。

俺がコナンから工藤新一に戻った時、蘭は泣いて喜んで、真実を聞いて泣いて許し、やさしくだいてくれた。

蘭は強かった。

でも、蘭は泣いて泣いて・・・

そつ、泣かしている張本人はこの俺。

だから、蘭に気持ちを伝えた。

蘭が俺のことが好きではないなら、もう蘭を泣かせないため、消えようと思っていた。

でも、蘭は泣いて「私も好き」と言っていた。

その時、俺は半ば無理やりのキスをした。

その後、蘭と楽しく話していた。

その日から一年たったこの日。

ついに俺達はこの日を迎えたのだ。

今俺はウエディングドレス姿で来る最愛の人を待っている。

彼女を幸せにして見せるのだ…

信じているからね（前書き）

WISHO2さんからのご提案です！

変なところがあるかもしれませんがよろしく願いします！

信じているからね

「はぁはぁはぁっ！」

新一はある場所へと全速力で走っていた。

ずっと自分を待たせ続けた最愛の人に会いに行くため、こんな夜中でも走っていた。

小さく街灯が新一の体を光らせていた。

汗はだくだく。もう体がへとへとになるまで、最愛の人のところに向かっている。

最愛の人の家の前まで来ると、新一はたくさんインターホンを押した。

強く願っていた。

最愛の人がもう誰かのことを好きになっっていないか、自分のことを忘れていないか・・・

「はい！」

中から最愛の人の声がする。

新一はその声にはあつと顔を明るくした。

最愛の人はドアを開けると新一の姿を見た途端、一瞬にして涙があふれた。

「蘭…ごめんな…」

「バカ…何してたのよ…ずっとずっと待ってたんだからあ！」

蘭は新一に抱きついた。

新一はいきなり蘭が抱きついたので驚きだったが、そのうちに、自分がコナンだったこと、トロピカルランドのこと・・・たくさん

のことを話し始めた。

蘭は何も言わず黙って聞いていた。

「本当にごめんな……」

「バカ……謝らないでよ。新一は悪くないじゃない。私は新一が戻ってきたことだけでうれしいよ?」

新一は蘭の言葉にありがとうと言い、半ば無理やりの口づけをした。

「蘭……好きだ……この地球上の誰よりも……」

新一は穏やかな声で蘭に告げる。

蘭は泣きながら「私も……好き」と言った。

新一はよかったとつぶやくともう一度蘭の影と重なった。

この記念すべき日の一年たったこの日。

今日は二人の最高の思い出となる日が生まれる。

2人は神父さんの問いに同じ答えをした。

そして、蘭は庭に出て、ウエディングブーケを投げた。そのブーケは園子へと渡って行った。

園子は嬉しそうにブーケを握りしめた。

蘭もうれしそうにほほ笑む。

「なあ蘭。俺、本当に蘭の隣にいていいのか?」

いまさらといつていいほどの時間で新一が蘭に聞いた。

蘭はあっけらかんと言いたそうな顔で答える。

「あたりまえじゃない。私は新一じゃないとだめなんだよ?」

そして、優しい笑顔を見せながら、新一の頬にキスを落とした。

新一は顔を赤くしていた。必死でポーカーフェイスを保とうとしているがもう駄目である。

そして、新一は蘭をお姫様だっこして車に乗せ、工藤邸へと向かった。

こうして、2人の記念すべきは迎えられたのである。

「ねえ新一。今も私のこと愛してる？」

子供に恵まれた蘭はアルバムを手にしながら新一に聞いた。
新一は何も言わずにいきなりキスをする。

「こういつこと。」

新一はそういうと蘭を抱きしめた。

「愛してるよ…ずっと…一生な…」

穏やかな声で言う新一。蘭は嬉しそうに
「私も愛してるよ…」

と囁いた。

信じているからね（後書き）

どうでしたか？

ちょっと変でしたかね…？

勝てない(前書き)

オリキャラ登場ということですよ！

勝てない

私の名前は清水亜海。

元気で明るい女子高生です！

そしてそして、私に初恋が訪れました！

お相手は工藤新一君！

私は新一君って呼んでるの！

でも、私にライバルがいる。

毛利蘭。

超嫌い！新一君にべったりしちゃってさ！

私の新一君なのにいゝ！

「新一君！亜海のこと好きい！？」

「好きじゃねーよ。」

「むうゝ！」

まあいいわ。きっと好きになるはずなの！

「蘭！今日のご飯ハンバーグな！」

「わかったわよ。」

ちよつとまってえー！なにになに！？何で毛利さんに聞くわけえゝ！？？

私は適当に底ろにいる人に聞いた。

2人の関係は何なのかと…

「夫婦よ！夫婦！」

ふう・・・ふう？

私の心の叫びが口に出そうなくらい大きなものだった。
夫婦になっていたとは…

そうして、私の初恋という花は一瞬にして花びらへと変わり、散ってしまった。

でも、毛利さん。やっぱりライバルなのよ！？
毛利さんよりいい恋見つけるんだから！

勝てない(後書き)

最後はハッピーエンド!?

作品のネタくださーい!
ネタ切れ中の鈴蘭です…

長年の初恋（前書き）

もしも、園子が新一のことが好きだったらという話を書いてみました。

でも、新蘭です。

園子と蘭の友情が深まる話ですね。

長年の初恋

私の名前は鈴木園子。

鈴木財閥の一人娘。

私は長年の初恋をしてきた。

そして、つい最近その初恋は終わってしまった。

私の初恋の人が私の親友と付き合ったのだ。

幸せそうな顔をして。

憎んだ。

私の親友を憎み憎んだ。

好きな人を奪った親友を恨んだ。

でも、彼女に勝てるはずがないの。

女の子がほしそうなものをすべて持っている彼女にはだれひとり勝ったことはない。

おまけに、天然で優しくて…

最高の人。

「園子…！」

「蘭…」

「新一！帰ろうよ！」

蘭は新一君を呼んでいる。

つい最近、蘭と新一君は付き合った。

そして、私の初恋は一瞬にして砕け散った。

そう、私の初恋の人は新一君なのだ。

蘭は私の親友。

「おうっ！」

かつこいい新一君。

その彼を手にした蘭。

2人とも幸せそうだった。

私には到底無理みたいだね…

「園子、聞いて！新一がねっ！」

下校途中、蘭が新一君のことで話していた。

新一君もけらけら笑っていた。

私は無理して笑っている。

2人の幸せ話なんか聞きたくない。

「……………じゃないわよ…！」

「「え……………」」

とうとうブチ切れた私。

もう…

とまることはないだろう…

「ふざけんじゃないわよお！……！……！」

「園子…?!」

「何よ！幸せそうな顔して！私の幸せを奪って！！」

好きだったのよお！新一君があ！蘭に新一君を奪われるなんてえ！

！蘭のせいよお！蘭の…蘭の…！！」

「園子・・・」

私は泣きながら叫んでいた。

新一君は驚いて何も言えない状態。

蘭も同じ様子だった。

「蘭っ！あんたなんかあ…！あんたなんかあ・・・！！」

「園子おおお！……！！！」

いきなり蘭が叫んだ。私ははっと我に返る。

蘭が叫んだのは私を止めさせるためであろう。
私はどうしようもなくなってその場に崩れ落ちた。
そんな私を蘭はやさしく抱いてくれた。

蘭はやさしかった。
そして、強かった。

私には到底できそうにないことを持っている蘭がうらやましかった。
だから恨んで憎んでいた。

「園子・・・！ごめんね・・・っごめんね・・・っ！園子の気持ち・・・
考えなかったね・・・っ本当にごめんね・・・っ」

蘭も泣いていた。私は蘭の温かい優しい心に静かに包まれていった。

蘭にひどいことをした。
蘭をすごく傷つけた。
謝らなければ・・・

「蘭・・・っ！新一君！ごめんなさい！私・・・」

「園子は悪くない！悪いのは私。新一だって悪くないの。私が園子の気持ちを考えなかったからいけないかったのよ！」

「蘭：俺も悪かったな、園子。」

蘭：新一君：

私：「どんだけ幸せ者なんだろう？」

気づいてなかったただけなんて：

バカだな：私：

「新一君っ！蘭を幸せにしないと、私がとるからね！」

長年の初恋（後書き）

園子と蘭の友情。

新一も今や、温かく見守っています。

蘭の優しさを書いてみました。

小さなLove letter (前書き)

新一が小さい頃に蘭にこっそりあげたラブレターです。
蘭は未だにわかっていません！

小さなLove letter

今日は満月。

新一が窓を開けて、空を見上げた。

空は濃い藍色をして、今にも新一を包み込みそうだった。

蘭と結婚して、二年たつ。

新一は毎日幸せな日々を過ごしていた。

隣で寝ている蘭の寝顔を見て小さくほほ笑む新一。

そんな新一はまた、夜空を見上げると、自分たちが小学二年生のことを思い出した。

「はいみなさん！きょうは、お友達におてがみをかきましよう！」

「はい！」

みんなが一斉に手を上げてこたえる。

そのなかでも、1人、つまらなそうにあくびしている少年がいた。

「ちよつとしんいち！ちゃんとききなよ！」

「へーへー！それで？おまえはだれにかくんだよ？たしか、2人ま
でだったよな？」

「うん！しんいちと、そのこちゃんだよ！？」

蘭は嬉しそうに話した。

新一も少し顔を赤くしていた。

「しんいちは何にかくの？」

「サッカーともだち。」

「わたしには？」

「かねーよ」

「ひどーい！わたしはかくのに！？」

「だーっ！うつせーな！」

新一はそれだけ言っていると教室から出て行った。
ちょうど休み時間だったので、怒られなかったが・・・。

「しんいちの・・・ばか・・・」

蘭はそれだけ言っていると園子のほうへ向かった。

そのあと、学校が終わると蘭は一人で帰っていた。

新一と帰りたくなかったのだ。

あんなことを言われてきつと怒っているだろう。

蘭はずっと自分を責めていた。

「しんいちにかくの、やめようかな・・・」

ぼそつと言った。蘭はどうしようか迷ったけど、やっぱり書くことにした。

新一とは幼馴染だから書きたかったのだろう。

『しんいちへ

きつときのうのことでおこっているとおもいます。

ほんとうにごめんなさい。

わたしはただ、しんいちにかいてほしかっただけなの。

ごめんね、じぶんかってだよね？

しんいち、こんなわたしだけど、いつまでもわたしといっしょにいてください。』

蘭はそう書くと、先生に言われたとおり、新一や園子家のポストに入れた。

蘭は次の日、学校に行くのが怖かった。

新一に怒られそうで、新一が無視しそうで。

でも蘭は行くしかなかった。

そして、学校に着くと、新一は何もなかったように接してくれたのだ。

「しんいち、てがみよんでくれた？」

「ああ、ありがとな。」

ちよつと顔を赤くする新一に蘭は嬉しそうにありがとつと言った。

しかし、蘭は気づいてくれなかった。

自分の家のポストに新一からの小さなラブレターが入っていたことを・・・。

そんなことがあったな…と新一はいまになってつぶやく。

そして、新一は小さなキスを蘭の頬に落とした。

「まだわからないんだな。小さなラブレター。」

この幸せ者。」

新一はそついうと蘭の横で寝た。

「ありがとな、手紙。」

小さなLove letter（後書き）

小さい頃の蘭と新一を書いてみました。
変な文章があつたら教えてください。

決まっていること（前書き）

WISHO2さんからのリクエストです！

決まっていること

「ねえ新一…。」

「んだ？」

「みてよ、きれいだよ？」

「何がだよ」

「ほら、雪よ！」

「ふーん」

見ての通り、新一はあまり関心がなく、ただ、敬愛するシャーロック・ホームズの「緋色の研究」を読んでいた。

蘭は新一の答えにむかっと来て

「何よ、本当に関心がないのね…」

とあきれ半分でその場を離れた。

「おい、蘭！まてよ！ったくよぉ、本当のこと言っただけじゃねーかよ。」

新一はそういうと本を机に置き、蘭のもとへ行った。

一応これでも恋人同士などである。

でも、ラブラブな毎日で第三者からみているとうらやましいような恥ずかしいような…？という感覚。

次の日―。

「らーん！あんたたち、恋人になったんだって！？」

2人で投稿して、教室のドアを開けたとたん、蘭の親友で新一の悪友でもある園子がいきなり言いだした。

その声に、教室にいたクラス全員が2人に目線を動かした。

「ほんとかよ！？」

「きゃー！やつとなつたのね！」

「いやー、おめでたい！」

みんな分かりきっていたような声や顔をして2人にからかってくる。

「それで？お二人さん！あなたたちどこまでいったわけえ！？」

「「は？」」

2人は同時にまぬけな声を出す。

その声に園子はずまらなそうに、

「まさか…まだ何もしてないんじゃないでしょうね！？」

と言った。

2人は何も言わずに顔を合わせて真っ赤になった。

まるでユデダコ。

そんな二人にクラス全員が笑った。

「なにになに！？何にもやってないわけえ！？」

「そ、そんなわけ…！」

蘭が一生懸命言おうとするが、何をしたことまでは言えない。

「じゃあなんなのよお！何をしたわけ？」

「うう・・・」

言葉に詰まる蘭と新一。

そんな二人にクラス全員はからかいまくるのである。

園子は二人には貸せようと一生懸命だった。

その時、教室の前扉が勢い良く開いた。

「おーい！みんな、何をしている・・・」

「先生！2人が恋人同士になったんです！今、恋人になって何をしたのかはかせている真っ最中ですよ！」

先生、いいですよ？はかせても！」

「・・・うむ・・・よしとしよう！はいたら教えるよー！」

と先生は機嫌よく教室を出て行った。

いいんかよ、せんせいがそれで！！（いいのかな、先生がそれで！）

2人は同時にそう思った。

「それで？蘭！新一君！何よー！何したのよー！」

園子は乗り気で聞いてくる。

その反対に蘭と新一は真っ赤になりながら、気まずそうだった。

「なんなら、ここでキスしちゃいなさいよ〜!」

「はあ!?!」

またここで2人で同時に言葉が出る。

「はいはい!キスしちゃって〜!」

「やれよ、工藤!」

「蘭ちゃんやんなさいよ!」

「キース!」

「キース!」

「キース!」

クラスがキスコールを始める。

新一と蘭はどうしていいのか分からなくなった。

「この場でキスしたくなかったら、はくのよ!」

「・・・わかったよ、はくよ、すべて・・・」

そう言い出したのは新一だった。

蘭はええ!と反対していたが、新一がもう言ったので仕方なく動じることにした。

「キスも何回かした。一緒にだって寝てる...」

「それでそれで!?!」

「その後は言えない...」

「あ、やっぱり〜!?!」

その途端、クラスは大賑わいになった。

2人は顔が真っ赤で何も言えずにただただ、黙っていた。

その後、クラスからのキスコールにより、仕方なく、2人は口づけを交わしたのであった。

決まっていること（後書き）

どうでしたか、WISHO2さん！
案外ラブラブなんです！

誰が好き…？（前書き）

新一のことを思う、蘭の気持ちです！

誰が好き…？

「新一は…私のこと好き…？」

蘭は、震える声で新一に聞いた。

「バー口。」

新一が鼻で笑い、答えを出す…。

さかのぼること一時間前。

新一が志保と仲良く街をあるつていたのだ。

そのようすをたまたま、蘭が目撃してしまった。

蘭は新一が浮気をしているのではないかと思った。

しかし、蘭は怒りよりも悲しみにあふれている。

自分より、志保を選んだのである。

婚約までしているに関わらず、志保と一緒に仲良く歩いているとは悲しくなる。

「新一…？」

「ら、蘭！？」

「蘭さん!!?」

三人で驚いている。

これでは三角関係ではないか……。

「どうして…新一と志保が…?」

震えた声で言う蘭。

新一はどうする事も出来ずにあたわたしている。

志保は眼を見開いていた。

「こ、これには、分け合っ……」

だっ!

蘭は新一の話を聞かずに町の中を走って行ってしまった。

新一は蘭を追いかけようと必死で走って行った。

志保はハアとため息をもらしながらあきれていた。

この志保のあきれには何の意味があるのかは、この二人の追いかけてこの後で…。

「おい蘭! までよ!」

新一が必死の思いで蘭の腕をつかむ。

蘭はつかまれた腕を振り払おうともがいている。

そして、今に至る。

「新一は…私のこと好き…？」

「バー口。」

「私は…新一が好きだよ？でも、志保のことが好きなら…新一の好きなようにして…。私の幸せは、新一が幸せなことだよ。」

蘭は半ば泣きそうな顔をして言う。

しかし、新一はふつと鼻で笑った。

「…好きじゃねーよ。」

新一の言葉に蘭は眼を見開き、うつむいた。それを見て新一は、
「ただ…愛してる。」

「え…？」

蘭は顔を上げた。

その顔はかわいらしかった。

「好きななんてものじゃない。愛してるんだよ。」

「でも・・・どうして？どうして志保と一緒にいたのよ？」

「・・・ほらよ。」

新一の手には縦長の箱があった。

蘭は？を浮かべると静かに受け取った。

「何...？これ・・・」

蘭は恐る恐る箱を開けてみると、そこにはあまり派手ではない、ダイヤモンドやパールなどが入れられてあるネックレスがあった。

「こ、これ・・・？私に...？」

蘭は驚きを隠せない様子だった。

「今日は蘭の誕生日だろ？だからさ、宮野に蘭の喜びそうなのを選んでもらったんだよ。」

「し、新一い...ごめんなさい・・・！」

「いいって蘭！」

その途端、新一は蘭の唇を奪った。

わかつただろうか、志保があきれた理由が。
蘭の単なる誤解から始まったはなしでした。

休日はあなたと共に（前書き）

星野由香里さんからのリクエストです！
2人のお出かけ中です！

休日 あなたと共に

「新一い！こっちだよ！」

蘭が片手をあげて、新一を大声で呼ぶ。

新一は走って蘭のもとへやってくる。

「わりいわりい！」

「めずらしいね、新一が遅れるなんて…なんか嵐でも来るのかしら？」

「ンだよ…」

新一はそれでもなんだか嬉しそうだった。というよりも、緊張しているというのか…？

一通り乗った後、蘭はトロピカルランド有名のお土産屋さんでいろいろ見ていた。

新一はへとへとでベンチでゆっくり座っていた。

買い物が終わらせた蘭を見ると新一はいきなりぴしっとして、蘭の腕を無理やりつかみ、何も無い広場へと向かった。

蘭はいきなりのもので何にもわからず、されるがままになっていた。

「ちょっと新一！何すんのよ！」

恋人になっても喧嘩の絶えない2人。

だが、今回は違った。

新一は反論してこないのである。

蘭は驚いて、まさかと思った。

（まさか新一…別れようって言っじゃ・・・）

蘭はそんなことを考えていた。

怖くてさびしくて何にも言えない蘭。

一方でこちらの新一は緊張で何にも言えないである。

2人で黙りこくっては、どうにも進まない。

「ねえ、次、名に乗る!？」

沈黙を破ったのは蘭だった。

「あ、いや!今はなさなくちゃいけないんだ!！」

新一はすごく真剣な顔をしている。

蘭はそんな新一を見て、確信した。

別れを告げ気なのだと。

「新一……」

「俺……」

蘭を愛してる…！世界中のだれよりも。だから…

結婚してほしい！」

「え……？」

蘭は予想もしていなかった出来事が起こり、何も言えずにいた。

「よ…喜んで!!」

新一は蘭の返事を聞いたとたんに思い切りキスをした。

キスをした時、広場の外から水が噴き出した。

とても素敵な光景をこっそり園子が見ていたとは知らずに・・・

その後、休日のことクラス全員にからかわれるのであった。

休日はあなたと共に（後書き）

どうでした？星野由香里さんの思った通りになればいいですけど…

永遠の憧れ（前編）（前書き）

今回は、新蘭ではなく、蘭と志保の友情です。

前の、園子と蘭の話で、園子を志保にしたような感じですね…
志保視点です。

コナンから新一に戻り、新一は蘭と婚約までしている設定です。

永遠の憧れ（前編）

工藤君が元の姿に戻ってもう4年。

大学生の工藤君。

その工藤君には婚約者がいる。

その婚約者は、私の永遠の憧れである、蘭さん。

蘭さんは私を黒の組織から命がけで助けてくれた。

拳銃で撃たれたのが、狙われた私でなく、蘭さんだった。

不幸中の幸いで、蘭さんは命を落とさず、三ヶ月間の入院だった。

蘭さんは強い。

私は未だに闇の中にいる。

すぐく…すぐく遠い感じがする。

彼女は天使。

私は悪魔。

これで私と彼女は対立する羽目になる。

私は蘭さんに勝てるはずがなかった。

なのに…

工藤君を愛してしまった。

蘭さんの最愛の彼を愛してしまった。

別にとる気はない。

でも…

どうしようもなく愛してしまった。
どうしてこんなにあなたは私の中で大きくなってしまったのだろう？
私には理解できなかった。

「志保！」

「蘭さん…」

蘭さんは笑顔で私の名前を呼ぶ。

その反対に私は少し嫌そうな顔をしていることを、自分でもわかった。

「志保、これ！」

渡されたのは、いちまいの封筒だった。

「何？これ。」

なんとなくわかりそうだった。

あの二人のことだ。もう進んでいるにきまっている。

私は恐る恐る中身を見てみた。
すると・・・

『結婚招待状
杯戸教会にて

工藤新一 毛利蘭
』

予想していたことがあつた。

そして、一番いやなことがあつた。

「・・・結婚…」

「そうっ！よかったら、志保の来てね！」

「そう…結婚するのね。」

「どうしたの？し．．．」
「ふざけないでよ！！！！」

「志保…？」

私はついつい怒鳴ってしまった。
でも、もう言ってしまったおう。
ここまで言ってしまったんだから。

もう、いつもの冷静な私ではなかった。

「あなたたちが結婚！？」
ふざけないでよ！人の気持ちもわからないあなたたちが幸せになれ

るわけ！？

ていうか！あなたと工藤君がお似合いとは思えない！」

「し、志保……」

「名前を呼ばないでよ……！」

「じゅめんね……」

「謝ってすむ問題じゃないわよ！」

「ごめん…ごめん…」

蘭さんは泣いていた。
やばい…何言ってるのよ、私…

口が勝手に…

「今すぐ結婚を破棄し、私と工藤君の婚約を進めるのよ！」

「うめん…うめん…」

蘭さんは悪くない！

私が悪い…！

でも…もしかしたら・・・今言ってることは私の本音なの…？

「早くして…」

「・・・わかった…」

「ありがとう、蘭さん。さすが、優しい人なこと。」

私が代わってしまふ。

今の私は本当の私？

ちがつわ…！

お願いだから…戻って…本当の私に…

永遠の憧れ（後編）（前書き）

前編の続きです。

永遠の憧れ（後編）

蘭さんと工藤君の結婚が破棄になったのはつい一週間前。
蘭さんは私のことを工藤君に言わなかった。

そして、工藤君を避ける蘭さん。

なんだかつい鼻歌を歌う。

「工藤君、ちょっと今日付き合ってくれるかしら…?」

「あ、ああ・・・」

蘭さんとの結婚が破棄になって私のほうにも目を向ける工藤君。

とてもうれしくて仕方ない。

「なあ、蘭！」

「・・・」

「一緒にショッピングいかなーか？宮野と一緒に・・・」

「ごめん・・・行けない・・・」

「そっか・・・」

工藤君はなんだか悲しそうだった。
そうさせたのはすべて私。

でも、蘭さんは私のことを工藤君に言わなかった。
どうして…？

「志保…ちょっと話があるの。」

「ええ。いいわよ？」

有頂天の私は裏庭へと向かった。

「それで？何かしら。話つて。」

「新一が好きなんでしょ？」

「ええ、そして、彼も私のことを愛して……」

「そんなのわからないじゃない。」

冷たく言い放つ蘭さん。

「蘭さん……？」

「私だって新一が好き！あなたのものだけじゃない！そして、私のものだけじゃない！」

「蘭さん！なら、あなたと工藤君はお似合いだっていうわけ！？」

「そんなのわからない！でも……もし。もし、新一が私のことを愛してくれるなら、私は彼と結婚したい。」

蘭さんの意見は正論であった。

私は、蘭さんを苦しめていた。

「ごめんなさい、蘭さん…！」

「私のほうこそごめんね、志保。」

「私…勘違いしてた。」

「いいの！志保。結婚式、来てくれる？」

「ええ！もちろん！」

私、勘違いしてた。
ばかだな。
蘭さん

ごめんなさい。

だから、私は2人の結婚を温かく見守る。

そして、2人の幸せを願う。

永遠憧れさん。
おめでとう…

初恋（前書き）

オリキャラ登場！簡単に終わらせちゃいます。

初恋

あたしの名前は山田光海。

大阪から来た、帝丹高校二年生や！

そんな活気な私にも初恋が訪れたんや。

相手はあの、工藤新一君！ほーんまカッコええんや！

でもな…ライバルがおるんや…。

毛利蘭ちゃん。

ほーんまカワええ子やで？

「工藤君、ほんまはだれが好き…？」

甘い声で言っただあし。

「俺は…」

あたしが好きなんやろ？

「蘭…が好き…。」

「え…？」

あたしやナイン？

あたしやのうて、毛利さん…？

「蘭は優しくて強くて泣き虫で意地っ張りで…俺の最高の相手だよ。」

「そ、そか・・・」

なんでなん？なんであたしやない…？

あたしの初恋はこの時、一瞬にして終わってしもたわ…。

でも、その後、三か月後、あたしは彼氏ができる。

相手はあたしの幼稚園から一緒の人。

ほんまはもしかしたら、こいつが好きやったのかもしれへん…

工藤君は単なる練習相手やったのかも…

あ、別に悪い意味やナインよ？

でもな、あたしは今、そいつしか見てへんで？

だって、好きなんやもん！

初恋（後書き）

短い初恋でしたね…

好きという気持ち

「好き」

この言葉を口にしたとき、自分の目の前にいる相手はどんな顔をしましたか？

顔を赤くしましたか？

ふんつと聞いていませんでしたか？

申し訳なさそうな顔をしていましたか？

いきなり抱きしめられましたか？

その場から立ち去りましたか？

その場にはもういませんでしたか？

いろんな場合があります。

好きとは、人間誰しも思う気持ち。

この気持ちは決して捨てていけない花。

この花を捨てることは、失恋と同じショックを受ける。

失恋するのが怖いから。

ショックを受けるのが怖いから。

そうやってにげるからいけない。

戦えばいいではないか。

どうして戦わないんだ。

逃げたって

走ったって

避けたって

そんなものは無意味である。

好きという気持ちは忘れてはいけない。

そんな感情はとっても素敵なこと。

その気持ちを大切にしなければ、必ず後悔する。

自分はいったい誰なのか、誰が好きなのか…。

今決まっていなくても、
いつかは現れる、運命の人。

付き合って・・・いないよ？（夢編）（前書き）

これは、園子と新一が中学生から付き合っていたのに、高校生にな
って新一が分かれると言い出し…新蘭、蘭と園子の友情の物語。

付き合って・・・いないよ？（夢編）

「別れよう・・・」

「はあ？」

「俺・・・好きな人がいるんだ・・・」

「誰よ!？」

「蘭・・・」

「・・・新一は・・・蘭が好きなの!？私の親友が好きなの!？私じゃなくて!？」

「ああ・・・」

「どうしてよあ!？なによ、いまさら・・・」

「ごめんな・・・俺、やっぱり蘭が好きなんだ。」

男女が話し合っている。

女子は悲しみ、涙を流し、男子はすまなそうな顔をしている。

「蘭は・・・?!蘭は新一のこと好きなわけ!？」

「さあな・・・。」

「ならどうして!？今のままのほうが安全じゃない!」

北風が二人の姿を冷たく冷やす。

まるで、2人がもう一緒になることはないように・・・。

「私は新一が大好き!愛してるのよ!？なのにあなたは・・・」

「俺は・・・昔お前が好きだった。でも・・・それは違うような気がした。お前とは、キスも、抱いたこともしていない。それじゃあな・・・。」

「まって・・・!待って新一い!!」

「ハアハアはあ……」
なんだっただろう……今の夢……。

中学三年、鈴木園子。

今、工藤新一と付き合っています。

親友は毛利蘭。

私と彼の関係を知らずに新一のことが好き。

かわいそうだけど、私も彼を愛してる。

ごめんね、蘭。

でも、この夢があたることは私、夢にも思わなかった。

付き合って・・・いないよ？（夢編）（後書き）

なんかにたようなばかりですね、私・・・。

付き合って・・・いないよ？（学校編）

「園子おーっ！」

蘭が大きな声で私を呼ぶ。

それにつられて私も大きな声で返す。

「蘭あん！」

私と蘭は親友。

大の親友である。

でも・・・

私は彼女を裏切ってしまった。

彼女の好きな人を奪ってしまったんだから。

「蘭、新一・・・君知ってる？」

「ああ、新一なら事件だよ？」

私よりも蘭のほうが知っている新一。

一応付き合っているから、呼び捨てで呼び合っているけど、新一の希望でみんなにはばれないようにみんなの前では私は「新一君」と呼び、新一は「園子」である。

そして、ばれないというのがすごい。

私たちは、中学一年になって付き合い始めたけど、キスとか、抱きついたりだとか、いっしょにねたりとかしてない。これも、新一がまだいいだろうと言っただけ。

私は新一が大好き。

でも、ここ最近新一は私と目が合わなくなった。

めがあっても、すぐのそらされてしまう。

私は問い詰める勇気がない。

新一に嫌われそうで・・・

それだけ愛してる。

「園子？」

私は・・・新一が大好きなのに・・・

「園子?」

蘭・・・?

「おい、園子お〜!」

蘭が・・・目の前に・・・いるう〜!?

「園子!!」

「は、はい!!」

ついつい敬語を使った私。

あちゃあー・・・

「大丈夫、園子。」

「え、ええ・・・まあね！」

「そう・・・それならいいけど・・・」

「ねえ蘭。」

「ん？」

「あんだ、やっぱり新一君のこと好き？」

「
.
.
.
?
」

お、ききめしり？

「ど……して……？園子は……そうなの……？」

「蘭……？」

「不釣り合いかもしれない……でも……私は好きだもん……。
仕方ないじゃない……」

「蘭……!!」

「園子が決める問題じゃないわ・・・」

蘭はそれだけ言うと自分の席に着いた。

彼女は半ば、泣いていた。

「何よ…素直にあきらめてくれればいいのに…」

ぶすつとした私に新一がそつと声をかけてくれる…なんてことは一回もない。

そうしてほしい。

私のわがママを聞いてほしい。

そつと彼の机をしてみる。

隣は蘭。

いいな・・・

ガラッ

「先生！遅れました！」

キャーッ

わが愛しの新一！

「しんい・・・」

「おつす蘭。」

「もう事件解決したの？」

「ああ、まあな。」

「早いねえ・・・さすが新一ね。」

「そりゃそうだ。」

「あら、ずいぶん自信家さんね。」

「うっせ。」

私が声をかけようとしたときに新一は私ではなく蘭に声をかけた。

偶然かと思い、昼、新一と一緒にご飯を食べようと思った。

「しんい・・・」

「蘭、一緒にご飯食べよーぜ?」

「はいはい。」

「俺の弁当ある?」

「はい!これでいいんでしょう?」

「サンキュー!」

仲良く喋る2人。

もうすぐ高校。

私と新一、どうなっちゃうのかな・・・

付き合って・・・いないよ？（高校編）

帝丹高校に入学した。

帝丹高校一年、鈴木園子。

まだ新一とラブラブ（ではないとおもっけど）な付き合いをしています。

新一は、やはり蘭というほうが私より多い。

これは絶対浮気ね…。

ということで、私は新一を呼び出した。

「ねえ新一、最近あなた…蘭しか見てないんじゃない？」

「・・・」

「どうして？私は・・・」

「別れよう・・・」

「はあ？」

新一が私の言葉をさえぎる。

「俺・・・蘭が好きなんだ・・・。」

「・・・新一は・・・蘭が好きなの！？私の親友が好きなの！？私じゃなくて！？」

ひどく怒った私。

自分でもわかる。

「ああ・・・」

「どうしてよお！？なによ、いまさら・・・」

泣いている私に新一はどうでもいいとでもいたそうな顔。

「ごめんな・・・俺、やっぱり蘭が好きなんだ・・・」

「蘭は・・・？！蘭は新一のこと好きなわけ！？」

「さあな・・・。」

「ならどうして！？今のままのほうが安全じゃない！」

北風が二人の姿を冷たく冷やす。

まるで、2人がもう一緒になることはないように・・・。

「私は新一が大好き！愛してるのよ！？なのにあなたは・・・」

「俺は・・・昔お前が好きだった。でも・・・それは違うような気がした。お前とは、キスも、抱いたこともしていない。それじゃあな・・・。」

「待ってよ...待ってよ新一！」

私は新一の後を追いかけても、足が動かない。

追いかけて、私たちがよりを戻せると思うの？

私たちは・・・もう終わったのよ！？

もう、彼のことは・・・わすれなさい？

心の言葉を聞いた私。

まるでジャンヌ・ダルクになったような気分。

それでも、涙が止まらない私。

とうとう、声を出して泣いてしまった。

「う…っ…っバカ…っバカアツ…いや…っいやだよ…っイヤアアアアアアアアツ!!」

悲鳴のような、悲しみの雄たけびのような声は空へと飛んでいく。

「新しい…っ」

私はそのまま一時間近くその場にいた。

その時、誰かの影が私の前にあった。
誰…？

「園子？」

う、蘭？

蘭が私を見つけ、話を聞いてくれた。

新一と付き合っていたことは話してないけど。

「そっか…そっか・・・」

蘭は悲しそうに聞いてくれた。

「園子、また新しい恋見つけたら？そしたら、園子もきつと楽になるんじゃないかな？」

「うん…」

それでも納得いかなかった。

なんか蘭を見るともやもやした嫌な感じが見えてくる。

「園子、帰ろう?。」

「いいよ、私、一人で帰る。」

「そう…わかった。じゃあね」

蘭は帰ってしまった。

いや…おいてかないで?

私は・・・新一が好きなのに…

明日、新一の家に行ってみよう・・・。

付き合って・・・いないよ？（工藤邸編）

私は今、新一の家の目の前にいる。

新一、昨日私に別れを告げた。

でも、私はあきらめないんだから。

大好きだもん。

愛してるもん。

ピンポーン

インターホンをそつと鳴らす。

一回だけなると、ギイツと音がして私に顔を見せた。

「ハイ・・・って、園子!？」

「ら、蘭!？」

どうして工藤邸に!？

「園子、どうしたの？」

「それはこっちのセリフ! 何で蘭がいるのよ!」

「だって、新一が・・・って、何で園子が新一の家に?」
ハッ和我に返る私。

やばいやばい。

これは新一と私の内緒の恋。
2人しか知らない恋なのよ。

でもまって。

新一、どうして内緒の恋なの？
いいじゃない。

盛大にみんな喜んでくれるわ！

「ちょっと、園子？どうしたの？」

「私は新一の彼女なの〜！」

「……え……」

お、蘭ったら驚いちゃって。

やっぱり驚くわよね…。

ん？確か蘭の好きな人って・・・

新一…だつたあああ！…！！

ややややややばい！…！！

「あ、ららら蘭？」

「・・・園子・・・新一と付き合ってるんだ…。」

やばいいい！

これいつちやったら一番まずい人にいつちやったよ…！！

「あ、だから蘭…」

「おめでとう…よかったね！お幸せに…！」

蘭はそれだけ言うと工藤邸から出て行った。
泣いていた。

泣かせた張本人はこの私。

どうしよう…どうしよう…！

蘭の幸せを奪っちゃった。

あきらめるしかないこと、わかってたはずなのに…！

私…蘭を傷つけた…。

「おい、蘭！まだかあ〜！」

新一…！

新一がこっちにくる。やばい、隠れなきゃ…ってどこも隠れるところか…っ

「おい、蘭…？」

新一とばつちり目があった私。

「何で園子が？」

「そ、それは…ちょっと話が長くなるから、中に入れさせて。」
「あ、ああ…。」

バカ、普通は入れないでしょ？
本当、優しくて鈍感なんだから。

「それで？蘭は？」

「帰ったわよ…。」

「は？」

新一が間拔けな声を出す。

まあ、仕方ないか…。

「なんで？」

「私が悪いの…。私…蘭に行っちゃったの…。あたしたちが付き合ってるって…！」

「はぁぁ!!!!???」

新一は思い切り大声を出す。
私はもう涙が止まらなかった。

「私…もう秘密にする必要ないって思ってた…蘭に行っちゃったのよ…っそしたら、蘭…泣いて帰っちゃった…!私…私…っ」

ランヲタスケテ…

ランヲナカセタノハコノワタシ

ラン・・ゴメンネ

言葉に出ない言葉。

私は空に向かって謝る。

蘭に届きそうで…蘭の心の届きそうで…。

「もう帰れ。」

冷たく言い放たれた新一の言葉。
わかってた。

こんなこと言われるの…わかってた…。

でも…本当に言われるとなるとやっぱり悲しい。

それよりも悲しい人はいる。

蘭・・・。ゴメンナサイ・・・ッ

「新一、蘭を幸せにさせてね…。」

「幸せ？もうお前のせいでつかめねーよ。」

は？

私のせいでつかめない？

確かに私のせいでこうなっちゃったのはわかる。

でも・・そうやって簡単にあきらめていいわけ？

蘭は…新一のこと好きなんだよ？

新一はそんなに意気地無しだったわけ？

「バカッ！！あんたそんな簡単にあきらめちゃっていいわけ？！蘭はねえ…長年あんたのことが大好きだったのよ！？こうやってさせちゃったのは私だけど、それを大逆転するのが男なんじゃないの！？私はねえ、あんたを三年間ずっと見てきたつもり！でもんあんた、蘭のことしか見てなかったんでしょ？だったら蘭の性格ぐらい覚え

ておきなさいよ！蘭はまだあんたのことが好きよ？蘭は新一の幸せを願ってる。あんたの幸せは、蘭を不幸にさせること！？それは違うはずよ！！あんたの幸せは…蘭と共に幸せになること・・・でしよ？」

最後の言葉、哀しかった。
いうのはすごく嫌だった。
でも・・・蘭に学んだ。

好きな人の幸せを願うのが常識。
それを自分のものにしようとするから罰が当たる。
そう、もう私は罰があたった。
これで…私にも幸せが訪れる・・・。

「・・・」

新一は黙って工藤邸を出て行った。
行き先はたぶん…
毛利探偵事務所。

蘭の住んでいるところ。

蘭が今、泣いているところ。
そこに救世主が現れる。

工藤新一という救世主^{ヒーロー}が。

付き合って・・・いないよ〜終わりを告げる言葉〜

新一の後をつけている重罪な私。

そもそもこんなことになってしまったのはすべて私のせい。

どうしてあんなこと言ってしまったのだろう…。

『私は新一の彼女なの〜!』

バカ…ッ

バカッ・・・

バカアアアッ

思い出すあの瞬間^{とき}。

ごめんね…ッ蘭…っ

あ、新一が…毛利探偵事務所に入って行った。（正しくは無理矢理入って行った）

「おい、なんだ？どうした、探偵坊主。」

「蘭は！？」

「ああ、蘭なら、今日平日だって―のに、急に家に帰ってきて、泣きながら部屋に入っていったよ。」

俺が何度話しかけても全く返事がねーんだ…。」

心配そうなことが、声ですぐわかる。

その時の様子がなんとなく想像できた。

あ、新一が蘭の部屋をノックする音が聞こえてくる。

「おい、蘭！？蘭！？」

新一の声が玄関前にいる私にまで聞こえてくる。

「
…」

相変わらず蘭は何にも答えない。
すべて私のせい。

「おい、何やってんだ？」

「お、おじさん…」

ハッと私は急いでおじさんの口をふさぐ。

「シート！私がいることは新一…君には内緒よ！」

こそこそ話で私は言うтусぐに新一にばれないように蘭の部屋に近づいた。

「おい、蘭！蘭！！答えろ！」

「
…」

「俺は…園子とは別れたよ…」

「
…え？」

部屋の中から蘭の声がする。

やっと答えてくれた。

その嬉しさが私の体を包み込む。

「どうして？どうして別れたの？私にそれ、いうことなの？園子と

新一の問題でしょ？それに…園子、新一と一緒にいたいんじゃないかな…。私のことは…いいから。園子の所へ行つて。そしたら、私も、園子も幸せだよ？自分勝手かもしれないけど、新一、お願いだから…園子を幸せにしてあげて…っ所したら…私も幸せだからね…
っ」

蘭は涙をこらえている。

バカ…ッ

本当は新一が好きで好きでたまらないくせに、自分より親友の幸せを願うなんて…。バカ…ッ

「なあ…蘭の幸せは何だ？」

「…？」

「蘭だつて幸せになりたいだろ？」

「…」

「俺も幸せになりたい。そのために必要な奴がいる。」

それは…

蘭…おまえだよ…」

「え…？」

新一…

やっといった。

やっといったか…

よかった…よかった…

蘭、これで私の役目も終わり。

がんばって。

今度は私があなたを守るからね…。

「し、新一…いいよ…入って…。」

蘭がドアのかぎを開けた。

新一が静かにはいって行った。

「ごめんね…新一…！私…わがままだった…でもね…。アリガトウッ」

「ああ…」

私はそつと2人にはれぬようにドアを少し開け、2人の様子を見ていた。

あ・・・

2人の影が・・・

重なっ
た…。

素敵…
ッ

私もいつか、こんな素敵な恋をしてみたいな…。

「じゃん・・・？」

園子さん！！？？？」

ハッ…

何を考えていたんだ、私は。
そう、あれは昔。中学の時のこと。

新一君と一時的に付き合った、蘭と新一君の忘れられない物語。ストーリー

いま、私の目の前にいるのは、私の大好きな真さん。

「あ、な、なに？」

「大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫！」

「あ、あの…失礼だと思いましたが…園子さんは以前、誰かと付き合い合っていましたか？」

「え…？」

新一君と付き合ってた…？

でも…あれ、本当に付き合っていたという実感が無い。

だって、キスもしてないし、抱き合ってもいない。

これって付き合っていたんだろうか？

しかも始まりは…

私が新一君に告白してからの物語。ストーリー

でも、本当に彼のことが好きだったのか、
全く覚えがない。

今からいつ答えは

私の今までのこれからの思い出かもしれない…。

私は…真さんしか…見てないもの…。

「付き合っ
て……い
ないよ？」

付き合っで・・・いないよっ！終わりを告げる言葉（後書き）

終わったーっ

いやあ・・・

たいへんでしたね。

次は、星野由香里さんのリクエストです！

感想など、お待ちしております！！

謝罪

私は謝らなければならない…

彼に…彼女に…

まずはじめに、彼女に…

あなたを苦しめてごめんなさい…！

彼がいなくなってから、ずっと泣いていたわね…。

あの彼が…江戸川君とは知らずに…

彼を私が小さくしてしまったから…

次に、彼。

彼女と元の姿で夫婦のような生活を送れなくてごめんなさいね…。

かれと・・・かのじょ…

あなたたちは…今幸せですか？

私は…いま、素敵な恋をしています…。

そばかすの付いた敬語で話す人。

彼は優しい。

私の永遠の憧れさんたち…。

私を…忘れないでくださいね…！

作者から

実は、ある都合により、この作品を中断いたします。

3、4カ月後にはできると思いますので…。

この作品の続きは当分ありませんが、絶対に最後までやりますので…。

もちろん、違う小説を一つ作ります。

その小説をどんとやっていきますので、「好きな人」は今までやってきたものしか見られません。
新しい小説をよろしければ見てください。

また、新しい小説は、新蘭いたします。

コ哀、新志などではありません。

登場人物といたしましては、工藤新一、毛利蘭、宮野志保、鈴木園子を中心とし、物語を進めていきたいと思えます。

オリキャラアリです。

オリキャラの名前は山城 優未。

性格等は作品でお確かめください。

また、オリキャラの名前が変更する場合があります。（こちらの都合により）

その場合はご了承ください。

作者から

実は、ある都合により、この作品を中断いたします。

3、4カ月後にはできると思いますので…。

この作品の続きは当分ありませんが、絶対に最後までやりますので…。

もちろん、違う小説を一つ作ります。

その小説をどんとやっていきますので、「好きな人」は今までやってきたものしか見られません。
新しい小説をよろしければ見てください。

また、新しい小説は、新蘭いたします。

コ哀、新志などではありません。

登場人物といたしましたは、工藤新一、毛利蘭、宮野志保、鈴木園子を中心とし、物語を進めていきたいと思えます。
オリキャラアリです。

オリキャラの名前は山城 優未。

性格等は作品でお確かめください。

また、オリキャラの名前が変更する場合があります。（こちらの都合により）

その場合はご了承ください。

作者から（後書き）

二つ入っている可能性があります…！
すみません、間違えたみたいです…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6030y/>

好きな人

2011年12月20日21時50分発行